
俺と妹

seike

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と妹

【Nコード】

N5465M

【作者名】

seike

【あらすじ】

俺たちはかつては仲の良い兄妹だった。そんな俺たちの関係が変わってしまったのは2年前のある事件が切欠だった・・・

プロローグ（前書き）

これはすれ違ってしまったある兄妹が、様々な人と事件に会いながら、お互いの大切さに気付き支えあって生きていくお話・・・にしたいとおもってます〃w〃

実の兄妹の恋愛系になる予定なので苦手な方は回れ右をお勧めします。

それと作者はこれが初の作品になりますので、いろいろ変なところがあるかもしれませんが生暖かく見守ってやってください><

プロローグ

プロローグ

俺は妹が嫌いだ

理由はいくつもあるが、その最たるものはあの路傍の石を見るかのような冷たい眼差しをしてくるからだろう

昔は仲が良かった気がする

どこにいくにしても俺の後ろをついてきたがり、そんな妹おれも放って置けなくて、どこに行くにも一緒だった

そんな俺たちがこんな風になってしまったのはいつたいつの頃からだろうか・・・

いや、誤魔化すのはやめよう

その理由を俺は知っている・・・それについて俺にはどうしようもなかったんだ・・・

最初は何とかしようとしたが・・・それでも俺はあいつの力になれなかった

あいつが最も苦しんでいる時に、俺は無力だった

きっとそれであいつを失望させてしまったのだろう

事の発端は2年前

あいつが中学に入学してからすぐのことだった

あの、俺にとって忌まわしく、俺たちの関係を変えてしまった事件
が起きたのは・・・

プロローグ（後書き）

なんとなく小説を書いてみたくて書き始めた本作品。

作者は妹物が好きなので、そういう系統を書いてみたいなあと思いき書き始めました。

が、なかなか小説を書くのって難しいのですね・・・

更新はおそらく亀のごとくなりそうですが、リアルが忙しくなりすぎてどうしても書けないということでも起きなければ、ちょこちょこ書いていく予定です。

こんな稚拙な作品ですが、読んでくれる方がいらっしやるとうれしいな、と思います。

第1話（前書き）

< 文章量が少ないのは・・・あまり気にしない方向でお願いします >

第1話

第1話

チュン・・・チュン・・・

遠くでスズメの鳴き声が聞こえてくる・・・

俺はその声をBGMにまどろみから目が覚めた

時刻は午前6時半、いつもの起床時間よりは15分ばかり早かった

少しばかり早いけど、目が覚めてしまったのだから起きるしかない

2度寝している時間もないことだし

「よつと・・・」

反動をつけてベットから飛び起きる

寝起きに凝り固まった筋肉を解しながら、俺は学校の制服に着替え
だした

・・・同じでひとつ、自己紹介をしておこう

俺の名前は齋藤信二、さいとうしんじ私立紅葉学園高等部に通う2年生だ

年は17、身長は170cm、体重は60kgとほぼ全国男子の平均だろう

家族構成は父、母、妹の4人家族

父と母はとある分野の研究員で家に帰ってくることはほとんどない
実質この家で過ごしているのは俺と妹の二人だけだ・・・

俺は征服に着替え終え、一階の洗面所に向かった

いい忘れたが部屋割りとしては俺と妹が階段を挟んで対象に部屋があり、北側が俺の部屋で南側が妹の部屋だ

父と母は一階の和室で寝ている

もつとも、今は半分物置部屋と化しているが・・・

洗面所に着くと先客がいた

流れるようなきれいな長髪の黒髪、ツリ目がちだが大きくクリクリとした目、パジャマの上からでもわかる年相応に慎ましやかな胸、全体的にスレンダーという印象になる我が妹だった

自分で言うのもなんだが、容姿端麗な妹だ

これで成績も学年3位以内を常にキープしているのだから恐れ入る

将来は敏腕秘書とかそういう風になりそうな見掛けだ

だが、そんな妹の俺を見る目はひどく冷たい

その眼差しは、まるで路傍の石ころを見るかのようにまったく興味を持っていなかった

妹は俺の存在など無視するように手早く歯磨きを終わらせると、挨拶もせずさつさと洗面所を出て行ってしまった

「やれやれ・・・」

毎度毎度の事ながら、本当に無愛想だ

いや、近所や友達とは年相応・・・とまではいかないまでも笑顔で接しているのを見たことがあるので、こんな態度は俺にだけなんだろう

俺はあの目で見られるととたんに関心の奥が冷えていく感じがする

それは俺の無力を自覚させ、自らの矮小さを突きつけてくるからだ

「朝っぱらから落ち込んでる場合じゃないな」

気持ちは沈んでいたが、こんなことは毎度のことなので自分の気持ちの切り替えはすっかり上手になってしまっていた

俺は歯磨きや洗顔などをたっぷり20分は掛けてから、居間に向かった

居間に着くとそこにはすでに妹の姿はなかった

テーブルに何も出ていない様子から察するに、朝食を食わずにすでに学校に向かったのだらう

俺と妹が通う紅葉学園は小・中・高一貫のエスカレーター式で、始業の時間は一緒だ

現在の時間は午前7時丁度

学校が始めるまではあと1時間半はある

特に部活動もしていない妹が家を出る時間としては早すぎる

それでもすでに学校に向かったのは・・・当然のこと、俺と顔をあわせたくなかったからだろう

いつそ清清しいまでの徹底ぶりである

かつては仲が良かった俺たちだが、今はこんな状態だ

ここまで徹底して嫌われていれば、俺も当然のこと相手を好きになることなんてできない

実の兄妹とはいえ2年間もこうまで冷たい態度で接しられれば、相手を好きになることなんて俺にはできなかつた

今では暗黙の了解としてお互い不干渉を決め込んでいる

「・・・さつさと飯食って、学校へ行くか」

俺は簡単にパンを焼いてバターを塗っただけの朝食を食べ、学校に向かった

自宅から学校までは徒歩で20分程度

少し学校に着くのが早いけど、部活動をやっているやつらはすでに学校に向かっている時間帯なので、気にせずに向かうことにした

案の定家を出れば俺と同じ通学路を歩くやつらがちらほら見かけられる

ふとそんな中に見知った姿を見たと思ったら、あちらもこっちに氣付いたのか元気よくこちらに向かって走ってきた

「おっはよう！しんちゃん！」

そう、元気よく挨拶してきたのは近所の内海家の次女、つつままな内海麻奈であつた

「ああ、おはよう」

「どうしたどうした！なんだかテンション低いぞ！」

「お前が朝っぱらから高すぎなんだ・・・」

茶髪のショートカットに、なにが楽しいのかいつもきらきらとさせている大きな目、体系は至って普通といえるのだが、その拳動の一

一つが元気があふれんばかりにきびきびしているこいつが麻奈だ
俺たちはいわゆる幼馴染にあたる

出会いは俺がまだ小学校低学年の頃、親の転勤でこの町に引っ越し
てきたとき、親が荷造りをしている間どこかに遊びに行つて来いと
言われ公園で遊ぼうとして向かった先に麻奈がいた

そのころから麻奈は元気いっぱい、初対面の俺たちの手を引っ張
つて一緒に遊ぼうと言ってくれた

もちろん、このときはまだ仲の良かった妹も一緒にいて、親が迎え
にくるまで遅くまで一緒に遊んでいた

そしてこの時に俺たちは友達になったのだ

あの頃は引越し先で友達ができるか不安でしかたなかったから、麻
奈という初めての友人は本当にありがたかった

その後も何度か公園で遊んでいて、初めて近所に住んでいることを
知った時は喜んでいたものだ

まあそんなことがあつて以来ずっと麻奈とは一緒である

「どした？また、妹ちゃんと喧嘩でもしたのかい？」

「あれを喧嘩と言えるのかどうかはわからんが、まあいつものこと
さ」

「ああ・・・まあ、確かにね」

こいつは俺と妹との微妙な間柄を知っている

伊達に幼馴染はやってはいない

「まつ、元気出せ元気出せ！朝からそんな顔してたんじゃ、今日一日がもつたいないぞ！」

「はいはい」

俺の暗い雰囲気察してこうやってわざとおどけてくれる、本当にかげがえのない友人である

俺が2年前からのこの状態に耐え続けられているのも、こいつのおかげであることも自覚している

本当に、俺にはもつたいないぐらいのやつだ

俺は素直に礼をいえず、よくこうやってそっけない態度をとってしまっが、こいつはそんなこともわかってるかのように笑顔で大きくうなずて

「じゃ、私は部活があるから急ぐね！」

と言い残し、かなりの速度で学校に向かって走り去ってしまった

「本当に、嵐みたいなやつだよ・・・」

口元が緩むのを自覚しながらも、俺は先ほどまでの憂鬱な気持ちばかりが吹き飛んでいるのを自覚していた

第1話（後書き）

幼馴染は女の子、定番ですね

こんな子が実際に幼馴染にいたら、本当に楽しそうですね

さて、今回ようやく主人公以外の人物が出てきました

妹と幼馴染ですね

エピソードとか入れてみましたが、くどかったでしょうか？

また、文章量ってこのくらいでいいんでしょうか・・・不安いっぱい第1話をお送りしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465m/>

俺と妹

2010年10月10日20時46分発行